辻 邦 生 の 考 古 学 Ⅰ

― “巴里な人々” ―

酒　井　龍　一

はじめに

『夏の砦』・『背教者ユリアヌス』・『花の載冠』・『西行花伝』等で知られる小説家 辻邦生はパリに三度留学し、当地に住居を持ち続けた“巴里な人々”の一員だ。

2003年９月、パリ・リュクサンブール公園の東方、５区デカルト街37番地に「辻邦生滞在記念プレート」が設置された。隣38番地には「ヴェルレーヌ（死亡）」と「ヘミングウェイ（滞在）」のプレートが既存し、文学愛好家必見の場所となっている。

2009年秋、軽井沢高原文庫で「没後10年 辻邦生展 豊饒なロマンの世界」が開催され、原稿・制作メモ・スケッチ・書簡・蔵書・写真・愛用品・著作等が展示された。これを機に、辻の「人間関係」を追いつつ、「辻邦生ワールド」の把握に努める次第だ。

「年譜」は井上明久編「辻邦生年譜」『辻邦生全集20』、エピソードは辻佐保子『辻邦生のために』・『「絶えず書く人」辻邦生と暮らして』、辻邦生『のちの思いに』等を参照する。

『時の扉』

私が辻邦生の存在を知ったのは1991年８月、シリア砂漠の隊商都市パルミラ遺跡の発掘中のことだ。昼は気温が40～50度になる灼熱地獄の現場。夜はナツメヤシ茂れる宿舎での団欒。贅沢にも、宿舎はベール神殿の境内にある。屋上でアラック（白濁する強い酒）片手に寝転べば、覆いかぶさる大銀河。星・星・星、また流れ星。進みゆく人工衛星。女王ゼノビアの運命はいかに。ゼノビアはローマ帝国（皇帝アウレリアヌス）打倒を夢見るが、反撃・破壊され、繁栄を誇ったパルミラは砂漠の砂に埋もれた（西暦272～273年）。

憩いのひと時、ある隊員が、シリア砂漠を舞台とする辻邦生の小説『時の扉』（文春文庫）を見せた。そこに登場する「ドクター田岡」の実在モデルが、わが隊の世話役 折田魏郎氏だ。シリア在住の獣医師で伝説的人物。牧畜産業に永年貢献し、今や国賓待遇にある。

砂漠と苦闘すること二カ月。発掘隊はようやく地下Ｃ号墓（西暦109年建造）の「石扉」を発見した。これぞわが「時の扉」だと感動。後年、地下宮殿Ｆ号墓（同128年建造）でも同様の感激を味わうことになる。碑文係の私は、出土したパルミラ語碑文を無事解読。これで御役御免となった。帰国後、川柳師の父か、『時の扉』の辻邦生か、いずれかの魂が乗り移って次の一句が閃いた。

それぞれが時の扉の鍵をもつ　龍一

図１　辻邦生展ポスター

図２　代表的な著書

図３　限定本と署名

図４　限定本と署名

図５　森有正への謹呈本

図６　パリ・ソルボンヌ界隈

図７　シリア・パルミラＦ号墓

図８　辻邦生『時の扉』

図９　テキシドール先生の著書と賀状

図10　パルミラ・碑文出土

図11　コレージュ・ド・フランセ

コレージュ・ド・フランセ

2002年のある日、小玉新次郎 関西学院大学教授から電話が入った。「酒井君、テキシドール（友人なので親愛を込めて）が会いたいと言ってるよ。近々、奈良につれていくからね」。Javier Teixidor 先生はパルミラを含むセム語世界の世界的権威で、COLLÈGE DE FRANCE の教授。雲の上、否、宇宙に浮かぶ大研究者だ。 9 月26日、テキシドール御夫妻と小玉先生が、なら・シルクロード学研究センターに御登場。何と穏やかな世界的権威だ。晴天の霹靂なので、何も言うことはない。

2003年元旦。再会を記す賀状が、「インシャーラ！（神のみぞ知る！）」の言葉と共に届いた。後年、コレージュ・ド・フランセを仰ぎ見たが、実に眩しかった。かつて辻邦生・佐保子夫妻は同所へ出入りしていた。霹靂のおかげで、「辻邦生（大関係）⇔コレージュ・ド・フランセ⇔（小関係）私」が生れた。以降、同館前を通るたび、「インシャーラ！」と叫んでいる。

『背教者ユリアヌス』

363年 7 月、ローマ軍団は皇帝ユリアヌスの遺骸を皇帝旗に包み、香料と腐敗止めを詰めて、
メソポタミアの砂漠を北に向かって歩き続けた。（辻邦生『背教者ユリアヌス』720頁）

辻邦生が『時の扉』を書く契機となった『背教者ユリアヌス』を加えると、こうなる。

皇帝ユリアヌスはシリア砂漠で死亡する（西暦363年）→パリ滞在時、辻はソルボンヌ横に遺る「ユリアヌスの浴場跡」を幾度も見ていた（1957年～）→辻『背教者ユリアヌス』刊行（1972年）→一読者の広瀬一隆・洋子夫妻が、シリアから辻に感想葉書を出す（夫妻は江上波夫団長率いる発掘隊に参加）→辻は広瀬夫妻に同発掘を小説に使いたいと要請する→広瀬夫妻は辻に発掘日誌を貸し、シリア砂漠を案内するという→辻は毎日新聞夕刊に『時の扉』の連載を始め（1976年 2 月）、シリア砂漠を探訪する（同 3 月：1 ヶ月間）→そこでシリア在住の折田氏と出会い、氏と広瀬夫人の案内でパルミラに至る→連載中の『時の扉』に折田氏を「ドクター田岡」として登場させる。そして「私＝酒井」に「接続」する。

自画自賛

私がパルミラ遺跡の発掘に派遣される（なら・シルクロード学研究センター・樋口隆康団長1991年）→そこで辻邦生『時の扉』を知る→『時の扉』の「ドクター田岡」のモデル 折田氏がわが隊の世話役である⇔地下墓の「石扉」を発見し、わが「時の扉」だと感動する→パルミラ語碑文の報文を書く（「Eight Palmyrene Inscriptions found in the Southeast Necropolis」1994年）→それを知ったコレージュ・ド・フランセのテキシドール先生が奈良に来られる（2002年）：パリ留学時、辻夫妻は同所へ出入りしていた（1957年～）→「辻邦生没後十年展」（2009年）を契機に、私が「辻邦生の考古学」を開始する。

「人生いろいろ」（島倉千代子）だが、「歴史プロセス」もいろいろだ。上記のプロセスに若干のロマンを感じるのは、単なる自画自賛である。

人間関係論

本稿では、私的な「人間接着法」に基づき、特異な「人間関係論」を展開する。「私的」を強調し過ぎるゆえ、客観的に言えば、本稿は歪んでいる。松本清張『点と線』は有名だが、本稿も「点と線」がキーワードとなる。あらゆる関係の起点は「結縁」だ。

聖徳太子と辻邦生は友達か。通例、答えは「否」である。だが私の介在で「聖徳太子⇔私⇔辻邦生」の関係が生じる。私は既に「聖徳太子の都市計画」『文化財学報23・24』や「推古朝都市計画の復元的研究」『同27』等を発表。加えて「辻邦生の考古学」も開始した。今、わが脳内に「聖徳太子」と「辻邦生」が共存する。「タモリ現象（友達の友達は皆友達だ！）」を援用すると、両者は友達となる。

端　　正

辻邦生は、風貌、人格、行動、小説・評論・随筆、生活、思想、人生など、どの点から見ても実に「端正」だ。本稿は歪んでいるばかりでなく、誤字・当字も実に多い。「*誤字・当字 わが人生のようなもの 龍一*」が私のモットーだ。それを忠実に実行している故、逆説的な意味では、私も「端正」と自称できる。

> 辻邦生氏をひとはみな紳士だというけれど、いちどでも氏の運転する車に乗ったことがあるのだろうか。それも、東京や軽井沢でなく、外国で。すくなくとも私は、驚きのあまり息がつまるほどであった。そのとき、氏は日ごろの優雅で温厚な紳士どころか、原野の風を切って本能のままに疾走する駿馬そっくりな野生児に変貌していたからである。
>
> 杉山正樹「辻邦生氏のもうひとつの顔」『辻邦生全集 20』

『北の岬』

時に「本」が「人間関係」を示す重要な「考古資料」となる。かつて辻邦生は、短編集『北の岬』に「森有正様／心から 辻邦生」と記して恩師に謹呈した。時は流れ、“幸運の女神”がほほ笑み、今、同書はわが机上にある。同書の軌跡は「辻邦生→森有正→私」。今、私は同書を眺めつつ本稿を書いている。従って「辻邦生←森有正←私」でもある。両関係を重ね合わせると、「辻邦生⇔森有正⇔私」となる。

同書は1970年９月25日発行。当時、パリに永住中の森有正は、同年７月11日夜一時帰国した。筑摩関係者と辻邦生と装丁家の栃折久美子らが出迎え食事。駿台荘泊。翌12日は、東大教授 渡辺一夫（辻邦生の恩師）と面談等の後、山の上ホテルで夕食。・・・。北海道大学で公演。札幌医科大学に入院。９月１日から学習院大学や国際基督教大学で集中講義・講演等。そして11月７日午後２時過ぎ、辻らは羽田空港で森の搭乗を見送った。

こうした経過から、この間、辻は『北の岬』に署名し、森に謹呈した可能性が高い。署名は、「ペン先の太い万年筆と黒インク」を用いて、やや急いで記されている。辻邦生は、通例、「筆やマジック」を用いて、落ち着いて署名する。

A

三回の長期留学を記録する「パリ滞在記」（後出）に頻出する「A」とは、辻邦生ファンなら周知のように、佐保

子夫人を指す。東京大学での出会いは、辻邦生『のちの思いに』に詳しい。夫人は有名なビザンチン絵画史研究者で、名古屋大学名誉教授。四十年の歳月を費やした大著『ローマ サンタ・サビーナ教会木彫扉の研究』がある。

夫妻は、生活・勉学・留学・旅行・読書・思索・研究・会話・討論・研鑽・批評・影響・競合・補完等しあった稀有な関係にあり、生涯、夫人は夫の「字を書く手」を見続けた。

字を書く手

「(本人は存在せず) 字を書く手だけが存在すればよい」が辻邦生の願望。「ピアニストが絶えずピアノをひくように、自分は絶えず書かなければならない」が信念である。辻は1999年７月29日の朝まで実行した。夫人の証言を要約する (『辻邦生のために』)。

1. ある時期までは「鉛豆ペン」と呼ぶ太いペン先の万年筆を日記や手紙に使っていた。原稿は鉛筆、それも一番安いＨＢの鉛筆を用いていた。
2. 体調を崩してからは、鉛筆を２Ｂから３Ｂに変える等、さまざまな筆記用具をためしたが、うまくいかなかった。
3. 1999年の春ごろから、辻邦生の乱れた文字を、佐保子夫人がワープロで清書し、短い推薦文などは口述筆記して仕上げた。

「字を書く手」は、生涯どれだけ著書を生み出したか。薬剤師で書誌家の木村潔 (『辻邦生書誌年譜 (1945～1988年)』) は「164種・272冊」(限定版等を含む) を収録。辻は以降も絶え間なく執筆し続けた。生涯総計は未確認。余談ながら、辻の著書には高価な「限定版」が多い。最高は『樹の声 海の声＜限定版＞』(朝日新聞社120000円)。私は、「朝日新聞西部本社整理部資料課旧蔵本」(限定三百五十部のうち 第六十一番) を保持している。

“巴里な人々”

1858年：日仏修好条約締結～2008年：日仏修好150年周年行事開催

“巴里な人々”は数知れず。“巴里は恋人”、“巴里は孤独”、“巴里は悪魔”，“巴里は非情”。巴里を“おまえ”と呼ぶ輩もいる。辻邦生は負け嫌い。「あ、これは私のセーヌだ、私のノートルダムだ、私のパリだ」(『生きて愛するために』126頁)。

“巴里な人々”は精神的屈強者だ。孤独が好き、悪魔が好き、非情が好き。真冬の石畳を下駄で闊歩する女流もいる。リュクサンブール公園のジョルジュ・サンド像が好き。セーヌ河岸の古本屋が好き。ピカソが何だ！ 貧乏が何だ！ 公園には鳩がいる。カフェ「ドーム」・「セレクト」・「ロトンド」や「シモンヌの家」が好き。日本が何だ！ 文化が違う。自分が何だ！“巴里”さえあればよい。セーヌはいつだって流れている。

カフェで何か書いている人は間違いなく“巴里な人々”だ。彼らは仏蘭西語を操る。それにしても小さなカップ一杯でよく喋るものだ。わが伴侶は二秒で飲み干す。夜の帳が早く降り始め長雨が続く秋となり、陰鬱な冬に耐えていると、やがて静粛で華やかなクリスマスを迎える。冷え切った“巴里な人々”の心にも灯りが点る。しかしだ。

巴里症候群

近年、“巴里症候群 Paris syndrome”（太田博昭）が急増中。やわな日本人に“巴里”は赤信号・赤信号！“巴里”は危険だ。君達は辻夫妻とは異なる。食堂の仏蘭西語メニューは悪魔だ。私は“巴里な人々”とも“巴里症候群”とも無関係。単なる“巴里徘徊男”だ。毎回フリーに来て、あちこち歩き、はい終了。黙々とメトロに乗り、美術館・博物館を巡る。カフェだけは「麦酒（びーる）頂戴！」（日本語）と叫ぶ。腹が減るとモノプリ（スーパー）で酒と食糧を確保。無目的の私とは異なり、辻邦生は小説家になる確固たる目的で巴里に来た。

忠告が一つ。「ボンジュール」と「メルシー・ボク」だけは不可欠だ。“二単語男”の私はただただ「歩けオロジー」だ。

歴　　史

「誰かさんと、誰かさんが花畑！」（作者未詳）。

ある時、ある場所で、ある人が主役となり、あるコトが起こる。個々ばらばらに、Ａも、Ｂも、Ｃも、Ｄも、・・・。その時はそれぞれ無関係。多様な「結縁」を起点に、彼ら・彼女らに玉石混合の「関係」が発生する。その膨大な沈殿物が「歴史総体」だ。

1844年３月30日：ヴェルレーヌ、フランス北部のメッスで誕生。

1872年２月：ヴェルレーヌ、放浪生活を開始（先ずベルギーへ）。
1872年３月25日：島崎藤村、長野県馬籠村で誕生。

1896年１月８日：デカルト街38番地でヴェルレーヌ死亡。
1896年９月：島崎藤村は東北学院作文教師となり仙台に単身赴任。

1899年４月某日：島崎藤村が秦フユ（冬子）と結婚する。
1899年７月21日：ヘミングウェイが誕生する。

1913年５月23日：島崎藤村、パリに到着する。

1921年12月21日：ヘミンウェイがアメリカからパリに到着する。

1925年９月６日：ヘミングウェイが『日はまた昇る』を脱稿する。
1925年９月24日：辻邦生が東京市本郷区駒込西片町十番地はノ13号で誕生する。

1930年４月：辻邦生は父の転勤で名古屋市の「鶴舞公園そば」に住む。
1930年11月21日：後藤佐保子が「鶴舞公園そば」の病院で誕生する。

1945～1947年：辻邦生・北杜夫らは、旧制松本高等学校思誠寮などで、「デカンショ節（丹波篠山の民謡）」をがなって暮らしていた。

寮。タイコのとどろき。デカンショの騒音。すばらしく馬鹿々々しい猛ファイトのストーム。「秋高原」のリズムに明滅した電灯。そして午前三時トロトロした眠りから、またタイコの音で呼びさまされる。…出陣だあ。（北杜夫『或る青春日記』）

1947年４月17日：「デカンショ節」の丹波篠山（二階町100番地）で赤ん坊が生れる。

1953年６月６日：辻邦生と後藤佐保子が結婚する。

1954年：ヘミングウェイが『老人と海』でノーベル文学賞を受賞する。
1954年：北杜夫が辻邦生の無為を心配し、「文芸首都」の集まりに連れていく。

1957年９月４日：辻邦生はパリ初留学のため、フランス郵船カンボージュ号に乗り横浜港から出航。出発時、小脇に「ヘミングウェイ」の本を抱えている。
1957年秋：ヘミングウェイはパリ回想記『移動祝祭日』に着手する。

1961年３月：辻邦生は三年七ヶ月ぶりにパリ留学を終え帰国する。
1961年３月：ある日、ヘミングウェイがハドリー・モーラー（最初の妻）のもとに最後の電話をかける（パリ時代の想い出の件⇔最後の著作『移動祝祭日』）。

1980年６月23日：辻邦生夫妻は、ヴェルレーヌが死亡し、ヘミングウェイが仕事場としたデカルト街の部屋の隣に、生涯の住居を確保する。辻の恩師は『デカルト研究』の森有正。

1999年７月28日：ヘミングウェイ生誕100年記念コンサート（東京・労音大久保会館）。
1999年７月29日：辻邦生、軽井沢で死去。

2003年９月24日：デカルト街37番地に「辻邦生滞在記念プレート」が設置される。

2009年７～９月：「没後10年：辻邦生展」が開催される。
2009年９月：私がそれを見学し、「辻邦生の考古学」を開始する。

永井荷風

幾年以来自分は巴里の書生町カルチェラタンの生活を夢みていたであろう。

（永井荷風『ふらんす物語』）

“巴里な人々”の元祖は永井荷風だ。辻は「口をへの字に結んだ」荷風晩年の姿を見ていた。1950年、辻邦生25歳のこと。プロセスはこうである。

辻邦生が旧制松本高等学校に入学する（1944年）→浅間温泉の下宿で大塚長春（一年先輩で演劇監督志望）と大

塚道子（妹で宝塚少女歌劇生）と懇意になる→後日、道子が東京浅草花月劇場に出演する→辻は東京大学に入学（1949年）し、女友達の大塚道子が出演する劇場に入り浸る→花月劇場の隣にロック座（ストリップ劇場）がある→荷風はロック座に「口をへの字に結んで」頻繁に出入する→その荷風の姿を辻邦生が目撃する。

偏奇の巣

【1920年】五月二十三日。この日麻布に移居す。母親下女一人をつれ手つだいに来らる。麻布新築の家ペンキ塗にて一見事務所の如し。名づけて偏奇館という（麻布区一兵衛町一町目六番地）。
【1945年】三月九日、天気快晴、夜半空襲あり、翌暁四時わが偏奇館焼亡す。
（永井荷風『断腸亭日乗』）

「偏奇館」は二十六年間の存在で「遺跡」となった。その頃、辻邦生は松本高等学校で落第し、勤労動員を免れ、回覧雑誌を作っていた（「年譜」『辻邦生全集 20』）。

辻は1979年、浅軽井沢に山荘（磯崎新設計）を建て、荷風の「偏奇館」にあやかって「偏奇の巣」（佐保子夫人によれば「ヘン・キーノス」と発音）と命名した。辻は荷風の陶酔者。荷風の「余は偏奇館に隠遁し文筆に親しみこと数えれば二十六年」を尊守。「場所も電話番号も身内と特定の方以外には秘密」にし、山荘で瞑想執筆に専念する決意を固めた。

『偏奇館吟艸』

わが蔵書の荷風『偏奇館吟艸』（直筆詩稿 1943年装綴）の複製【限定350部の内第八十】を開くと、「De la musique avant toute chose－Paul Verlaine」の生文字が眼に入る。荷風はヴェルレーヌの陶酔者。1910年 2 月 1 日「ベルレーヌの伝記を読みて」（『荷風全集 第八巻』）があり、『吟艸』に「Paul Verlaine」と記す33年前には陶酔していた。

辻邦生は山荘「偏奇の巣」建設の翌1980年、荷風が陶酔したヴェルレーヌが死んだ部屋の隣人となる。

遺　　跡

偏奇館前に新しい道路が一本できたので、やむをえずそこに碑が建てられました。泉ガーデンの前には「偏奇館」の石碑が埋め込まれており、「ああ、ここが」という感じで往時をしのぶことができます。
（永井永光『父荷風』）

東京。地下鉄南北線の延長、「六本木一丁目」で下車。徒歩すぐに荷風の「偏奇館」跡がある。

1956年 9 月、東京銀座七丁目の資生堂本社前、弥生館ビル地下に、「偏奇館」でなく「偏奇の巣」でもなく「偏喜舘」がオープンした。「格は一流・値段は三流」。施主は荷風養子の永井永光。「偏喜舘」は19年 9 カ月存在し、遺跡にもならず移転した。偏奇館（永井荷風）・偏喜舘（永井永光）・偏奇の巣（辻邦生）。

歩けオロジー（国内）

1．東京都本郷区駒込西片町十番地はノ十三号（誕生地）

図12

図12　北杜夫の著書と署名

図13　辻邦生旧宅付近（国分寺）

図14　同上

図15　軽井沢から浅間山を望む

図16　永井荷風『偏奇館吟艸』

図17　辻邦生の住居付近（高輪）

図18　同上

図13

図14

図15

図16

図17

図18

図19　カンパーニュ・プルミエール街

図20　同左（鉄格子の内部）

図21　ロベール・プランケット街

図22　同左からブランシュ駅方向

図23　デカルト街・辻邦生のプレート

図24　ヴェルレーヌのプレート

図25　デカルト街

図26　辻邦生（左）・ヴェルレーヌ（右上）・ヘミングウェイ（右下）

2．旧制松本高等学校＋思誠寮→浅間温泉の下宿。半農家背後の小屋の二階＋東御殿の湯：混浴。

3．東京都国分寺市国分寺2405番地（国分寺市東元町３－34－３）。結婚後のユニークな住居。1953年建設。弟愛也設計。『辻邦生全集20』に写真収録。

4．東京都港区高輪３－１－10。1971年から居住。マンション二階（仕事部屋）と六階（夫妻住居・大きな風呂・熊のぬいぐるみ）（見学禁止）。

5．軽井沢の山荘「偏奇の巣」。1979年建設。磯崎新設計。建築雑誌では「ASKA山荘」と記載。Ａは新（あらた）・Ｓは佐保子（辻夫人）・Ｋは辻邦夫・Ａは宮脇愛子（磯崎夫人）の頭文字。所在地は未公開。地図は『辻邦生のために』（54頁）。

歩けオロジー（巴里）

一回目留学を歩く：『パリの手記：全五巻』

：1957年９月～1961年３月（小説執筆戦略創出を熱望する思索学生）

：カンパーニュ・プルミエール街８番地乙四階（見学禁止）。

【リュクサンブール公園で「ヨット」を見学。公園南端の噴水近く、ネー元帥像前から、モンパルナス大通を西に進む。左側二本目がカンパーニュ・プルミエール街。左折し、モンパルナス墓地に向かって進む途中、右手に「8BIS」と記された鉄格子の建物。格子の中を覗く。反対側、23番地に藤田嗣治の自宅・アトリエが存在した。その後、モンパルナス方面のヴァヴァンでカフェ巡り（ドーム、セレクト、ロトンド）】

二回目留学を歩く：『モンマルトル日記』

：1968年７月～1969年９月（『嵯峨野明月記』と『背教者ユリアヌス』の完成を目指す気鋭の小説家）。

：ロベール・プランケット街６番地二階（見学禁止）。

【地下鉄２号線ブランシュ駅で下車。クリシー大通（東西方向）の北側に出る。有名な「ムーラン・ルージュ」を左手に、北にのびる坂道がルピック街。右手を見ながら進むと露地風のプランケット街。右折し進むと行き止まり。建物の二階左側の部屋。床が傾いている。その後、「ムーラン・ルージュ」もよし、モンマルトル丘上の似顔絵もよし。40€】

三回目留学を歩く：『パリの時：全三巻』

：1980年６月～1981年10月（パリ第10大学で「日本文化入門」を講義する仏語の堪能な大学教員）。

：デカルト街37番地三階（見学禁止）。

【リュクサンブール公園、ソルボンヌ、コレージュ・ド・フランセ等を散策。パンテオン（サント・ジュヌビエーブ聖堂）の北側を東に歩むと、眼前にサンテティエンヌ・デュ・モン教会があり、南方向の道がデカルト街。レストランの赤い覆いが特徴。左上方に「辻邦生滞在記念プレート」がある。隣のヴェルレーヌとヘミングウェイ（仕事場と住居）を見学。その後、コントレスカルプ公園と庶民的なムフタール市場散策】

プレート

辻夫妻はデカルト街37番地の三階を、1980～1999年まで住居とした。「律子さんが見つけてくれた家は、まさにこの賑やかな界隈のまん中にある。階下は軒並みレストラン、カフェ、クレープ屋、居酒屋である」（『夏のひかり 満

ちて』)。律子さんの夫は有名な福本章画伯。毎日新聞夕刊の『時の扉』や朝日新聞朝の『雲の宴』の挿画を担当した。プレート設置には、食エッセイストで引っ越しプロの戸塚真弓さん(『パリ住み方の記』)と、ワイン愛好家でパリ第四大学総長のジャン・ロベール・ピットの御夫妻が尽力された。

ヴェルレーヌ

「辻邦生」の右隣(38番地)に「Paul VERLAINE(1896年1月8日死亡)」のプレートがある。ヴェルレーヌは、ここウージェニー・クランツのアパートにて脳溢血で死亡。枕元に同棲者ウージェニーと若い画家コルヌティがいた。葬儀はサンテティエンヌ・デュ・モン教会。バティニョル墓地に葬られた(中込純次『文学に現れたパリ』)。

「荷風はヴェルレーヌに陶酔。『偏奇館吟艸』に「Paul Verlaine」と筆記・・・時が流れ・・・辻邦生は山荘を建て「偏奇の巣」(←荷風「偏奇館」)と命名→辻はパリ・デカルト街37番地に住居を確保→隣はヴェルレーヌ死亡の部屋≒ヘミングウェイの仕事場」。

ヘミングウェイ

同一階入口にヴェルレーヌと、HEMINGWAYのプレートがある「ERNEST HEMINGWAY LIVED IN THIS BUILDING FROM 1921 TO 1925」。英語なのは彼がアメリカ出身だから。

ジョン・リーランド『ヘミングウェイと歩くパリ』(高見博編訳)によれば、22歳のヘミングウェイは、1921年12月、歳上の新妻ハドリーと共にアメリカから到着。デカルト街38番地に近い、カルディナル・ルモアーヌ街74番地のアパートに住み始めた(プレートあり)。コントレスカルプ広場周辺は、当時、「祖国放棄者達=ロスト・ジェネレーション」(ガートルード・スタインの言葉)の溜まり場。デカルト街38番地の最上階は、文学修業に励む彼の「仕事場」(1921〜1925年)であった。

デカルト街

ヴェルレーヌ:デカルト街38番地?階(1896年:死亡)
ヘミングウェイ:デカルト街38番地最上階(1921〜1925年:仕事場)
辻邦生:デカルト街37番地三階(1980〜1999年:パリの住居)

東京大学

東京大学仏文科。定員15名。1945年まで定員が満たず、無試験合格が原則。1947年頃から異変発生。受験者急増(数十人〜五十人)。「東大仏文バブル」は1980年頃まで続いた。
(菅野昭正『明日への回想』参照)

辻邦生は、1949年、渡辺一夫に憧れ仏文学科に入学する。学友列記。

菅野昭正(社会学科から仏文学科へ)・二宮敬(辻が初留学で乗船するカンボージュ号で帰国)・大久保輝臣(辻がパリ到着時、出迎えのリヨン駅で抱擁)・粟津則雄(辻が「文豪」と呼んだ人)・滝田文彦(辻と“うま”があった人)・栗田勇(紫綬褒章受章)・橋本一明(精神の「純潔」がモットーの人)・小林善彦(「フランス人は察しの悪

い人間」と決めつけた人）・福井芳男（NHKフランス語講座を20年）・森本和夫（フランス思想と道元の関係を研究）・鈴木道彦（東大教授 鈴木信太郎の子息）・山路昭（辻が挿絵仕事を斡旋し60万円をとる夢を見た）・二宮フサ（東大教授の令嬢で二宮敬夫人）。

教授陣は、鈴木信太郎教授（仏文科を活性化した人）・渡辺一夫教授（終戦後、夫人に七色パンティを買って来た人）・杉捷夫助教授（医学知識を活用し薬用アルコール等で即席ウィスキーを造った人）・森有正助教授（東大助教授のポストを捨て、孤独に“巴里な人々”の一員になった人）・中村真一郎講師（欧羅巴にゆく越路吹雪に在仏の「森有正」を紹介し、結果として彼女を怒らせた人）・中島健蔵講師（「ケンチ」と呼ばれた毒舌な人）と多彩だった。

東大教授

> パリと別れる日が迫ってきた。リュクサンブール公園の落葉を踏みしめながら、永遠に去ったパリの夏を思いながら、もう駄目だと観念した。霧のなかで中世の面影に甦るクリュニー博物館の庭に立って、これも永遠に失われる！ 駄目だと思った。冬の陽を浴びて、セーヌ河にどっしりかかっている橋梁のポロフィルを眺めながら、これもまた失われると思った。
>
> （「滞仏雑記（1931－1933）」『渡辺一夫著作集 10』）

辻が渡辺一夫教授と初めて接したのは1949年４月半ば。東京大学12番教室。その時、身体に異様な旋律が走った。近くの西片町に住む辻は、歩いて真砂町の教授宅を度々訪問。水割り焼酎を拝受した。

1931年７月～1933年３月、渡辺はフランス在外研究員として留学。パリ到着初日はソルボンヌ広場、ヴラン書房向かいのホテル・セレクトに泊った。時は流れ、最後の日。上記の感情も“巴里な人々”症候群の一例。ネガティヴな「パリ症候群」とは違う。“巴里”に魅了され過ぎての武者ぶるいだ。誰もが叫ぶ。「巴里を離れたくなーい！」。

林芙美子

1931年11月23日６時43分、『放浪記』の林芙美子はパリ北駅に到着。ホテル・フロリドールやホテル・サボイに滞在。真冬の巴里を下駄で闊歩し、「巴里の小遣い帳」と「日記」を書き、しかるべき「人間関係」をもった後、1932年５月12日夜、パリ・リヨン駅出発。同年６月15日、神戸港に帰国した。

渡辺一夫は、パリで芙美子と懇意になる。1932年１月16日、芙美子を見舞った渡辺は言った。「お死になってもかまいませんよ。僕たちが御香典ぐらいとぼしたげますから」。『林芙美子全集』の編集者 今川栄子氏は、人間関係論の立場から「林芙美子ワールド」の考古学を実践する（『林芙美子 巴里の恋』）。芙美子関係の資料は東京都新宿歴史博物館蔵。

図27 『放浪記』

大塚道子

辻邦生が東大に入学（1949年）→恩師は渡辺一夫（東大教授）→渡辺がパリ留学（1931～1933年）し、

『放浪記』の林芙美子と知り合う（1932年）。

時は流れ、「＋α」が生じた。1996年９～12月。森光子が芸術座で『放浪記』の林芙美子を演じた時、芙美子の母親役は大塚道子が演じた。課題発生（この大塚道子が、辻邦生の女友達（浅草花月劇場）の大塚道子と同一人物か確認する必要）。1996年４月７日～1997年７月27日、辻は水村美苗との往復書簡を朝日新聞紙上で連載中（『手紙 栞をそえて』）。突然、同年９月１日以降～12月８日まで休載となった。辻は入院・治療に専念していたので、同舞台を見ていない可能性が高い。

森本六爾

「・・・森本氏来る。不快だ。・・・」（1932年１月12日火曜日 芙美子の日記）

パリにおける林芙美子の関係者は、渡辺一夫・森本六爾・白井晟一・外山五郎・別府貫一郎の五人。この内、森本六爾は奈良県出身の考古学者で、弥生文化研究の先駆者だ。

時が流れ、2003年10～11月、大阪府立弥生文化博物館で「「森本六爾、小林行雄と佐原真」展が開かれ、森本六爾に宛てた林芙美子の手紙類（京都大学考古学研究室蔵）が一挙公開された。手紙類は「人間関係」を最も明示する「考古資料」だ。

考古学徒

大阪府立弥生文化博物館は、「国史跡 池上曽根遺跡」（弥生集落）」の上に建っている。私は青春時代の大半（1970年代）を同遺跡の発掘で費やした（第二阪和国道遺跡調査会）。私の著書に、「林芙美子」でなく、「森本六爾」が度々登場する（『歴史発掘６ 弥生の世界』・「考古学者と弥生土器」『奈良大学文化財学報21』）。

森本の学弟が小林行雄（京都大学）。小林の愛弟子が佐原真（奈良国立文化財研究所→国立歴史民俗博物館）。佐原の指導を受けた私は弟子を自認。「森本六爾→小林行雄→佐原真→私」の関係で、私は奈良大学に奉職できた。

「学恩は羽毛布団の暖かさ 龍一」。

辻邦生（東大生）⇔（恩師）渡辺一夫（懇意）⇔林芙美子⇔（懇意）森本六爾（学兄）⇔（学弟）小林行雄（師匠）⇔（愛弟子）佐原真（指導）⇔（学恩）私（「辻邦生の考古学」）⇔辻邦生。

白井晟一

林芙美子と特に関係深いのは建築家 白井晟一。白井は1935年に帰国。長崎県佐世保市に「懐晟館」（白井が設計）が建設され、Ａ３判の大型本『懐晟館 白井晟一の建築』も刊行された。著者は辻邦生・磯崎新＋白井晟一「あとがき」。白井の図面に加え、辻邦生「典雅な根源への思慕」と磯崎新「正息としての建築」が収録された。白井晟一と辻邦生との関係には、建築家 磯崎新の介在が推測される。

辻邦生⇔渡辺一夫⇔林芙美子⇔白井晟一⇔磯崎新⇔辻邦生。

東大助教授

辻が入学した直後、森有正の姿はキャンパスから消えた。森は1950年９月23日マルセーユ上陸。近くのバーに入

り、心中で「巴里に行きたくなーい！」と叫んでいた。やがて“巴里の人々”の一員に変貌。そのまま東大に辞表を出す。実妹の証言を紹介する。変貌の影に犠牲あり。

> 一年の予定は二年にのびた。そして更に三年になり四年になり、終に二十七年にも及んでしまった。二年が終るまでは、フランス政府の正規の留学生としての待遇を受け、日本の大学の方も助教授の身分であった。その境界線を越えて、滞仏が長びくにつれて、そこに生じる日本側の社会生活のふれ合いの中でのきしみは壮絶を極めた。
>
> （関屋綾子『一本の樫の木：淀橋の家の人々』）

前史・空白・後史

> この本（『デカルト研究』）の原稿も、そんな時、試験の答案の積重ねられた傍に置かれていたものであった。・・・。遠くパリにおいでになる先生の御健康を祈るや切である。
>
> （「あとがき」『同上』東大教組出版部）

【前史】1950年８月の暑い盛り、東大法文経13番教室。森有正は「パスカル」・「デカルト」の集中講義をした後、慌ただしく試験をすませ姿を消した。８月28日、神戸港を出港したラ・マルセイエーズ号は９月23日早朝、マルセイユ港に到着した。

【空白】森有正『デカルト研究』は、森がパリへ出立後の1950年11月30日刊行。「あとがき」は、なぜか東大教組出版部による。森は試験をした後、原稿を答案束の傍に置き、そのままパリ留学に出発。１年後に帰国のはずが、東大に辞表が届いた。

【後史】『デカルト研究』の森有正は1950年にパリへ留学。そのまま永住し、“巴里な人々”の一員となった。辻邦生は1957年にパリへ留学。恩師 森に再会すると共に、1980年から「デカルト街」に生涯の住居を確保し、“巴里な人々”の一員となった。

パリ滞在記

【１回目】『パリの手記 全五巻』（河出書房新社）＝『同 全一巻』（同）
【２回目】『モンマルトル日記』（集英社）
　　＋『詩への旅 詩からの旅』・『時の終りへの旅』（筑摩書房）。
【３回目】『パリの時 全三巻』（中央公論社）

旅立ち

辻邦生が、フランス政府保護留学生として、パリ初留学のため横浜港を出港したのは1957年９月４日。フランス郵船カンボージュ号の四等船室。フランス政府給費留学生の佐保子夫人は別途、飛行機で渡仏する。

出発時の写真がある（「アルバム」『作家の世界　辻邦生』）。辻夫妻・なだいなだ夫妻・橋元秀教の五名の姿。もう一枚には、妹 禮子・佐保子夫人・叔母 夏子・母 キミ。眼前のカンボージュ号に乗って、学友の二宮敬がフランス留学から帰国したばかりだ。彼は言った。「いいよ、フランスは」。

頭文字

固有名詞は現存人物である故、頭文字で記した（『パリの手記Ⅰ』）

『パリの手記Ⅰ』には、実名（氏名あるいは苗字）に加え、様々なローマ字名が登場する。後者の実名は、今日、辻夫妻と関係者以外には不明な場合が多い。

出航した途端、早速「A」（妻＝佐保子夫人）が登場する。辻が明記した「頭文字で固有名詞を記す原則」には合致せず。夫人の旧姓は「後藤」。本来なら「G（後藤）」か「S（佐保子）」。夫人のフランス語論文には「Tsuji, Sahoko, G.,」と記す。

“巴里”への日々

35日間の旅。詳細な『手記Ⅰ』から、本稿に関係する日々のポイントを記す。【記載日】場所：ポイント（出来事）に「時差」が生じている場合が多い。

【1957年９月４日】横浜港出航（●掲載せず）。
【９月５日】神戸港：Aから速達便（レター・ペーパー綴りと千円札）。
【９月６日】：ギィ・シクレ（以下、頻繁に登場）と朝食。
【９月７日】：昨夜、月夜の海を眺めた。ギィが一緒。
【９月８日】東支那海：神戸港で20枚の葉書を出す（大半は見送り御礼）。
【９月９日】南支那海
【９月10日】（●掲載せず）
【９月11日】（●掲載せず）
【９月12日】マニラ：ツーリスト・クラスにいる日本人留学生（気が重い）。友人Tが呼んでいる。
【９月13日】南支那海：日本人留学生がギィに付きまとう（がっかり）。
【９月14日】南支那海
【９月15日】サイゴン
【９月16日】サイゴン：T・Mさんの夢。不機嫌そうな仏人乗船・同室。
【９月17日】ボルネオ海：昨日の苦りきった男。
【９月18日】シンガポール
【９月20日】シンガポール：植物園にゆくと、ばったり日本人留学生に会った（困ったな・まずかった）。
友人・仏語の達人Tと話。
【９月21日】マラッカ海峡
【９月22日】印度洋：民衆のための歌い手シクレと南十字星を見る。
【９月23日】印度洋：サイゴンからの仏人（少々船酔い）。
【９月24日】（●掲載せず）：辻邦生の誕生日。
【９月25日】コロンボからアラビア海：Aと宗吉（北杜夫）から手紙。
【９月26日】マラバル海岸：パリのOに手紙（出迎え要請か）。
【９月27日】ボンベイ：Aの悲しい夢。A・宗吉・Oへ手紙。

図28

図29

図30

図31

図28　パリ初留学（中央は辻邦生・両側はなだ夫妻・左端が辻佐保子）

図29・31・32　各種のパリ滞在記

図30　なだいなだ氏の著書と署名

図33　コントレスカルプ広場

図34　リュクサンブール公園

図32

図33

図34

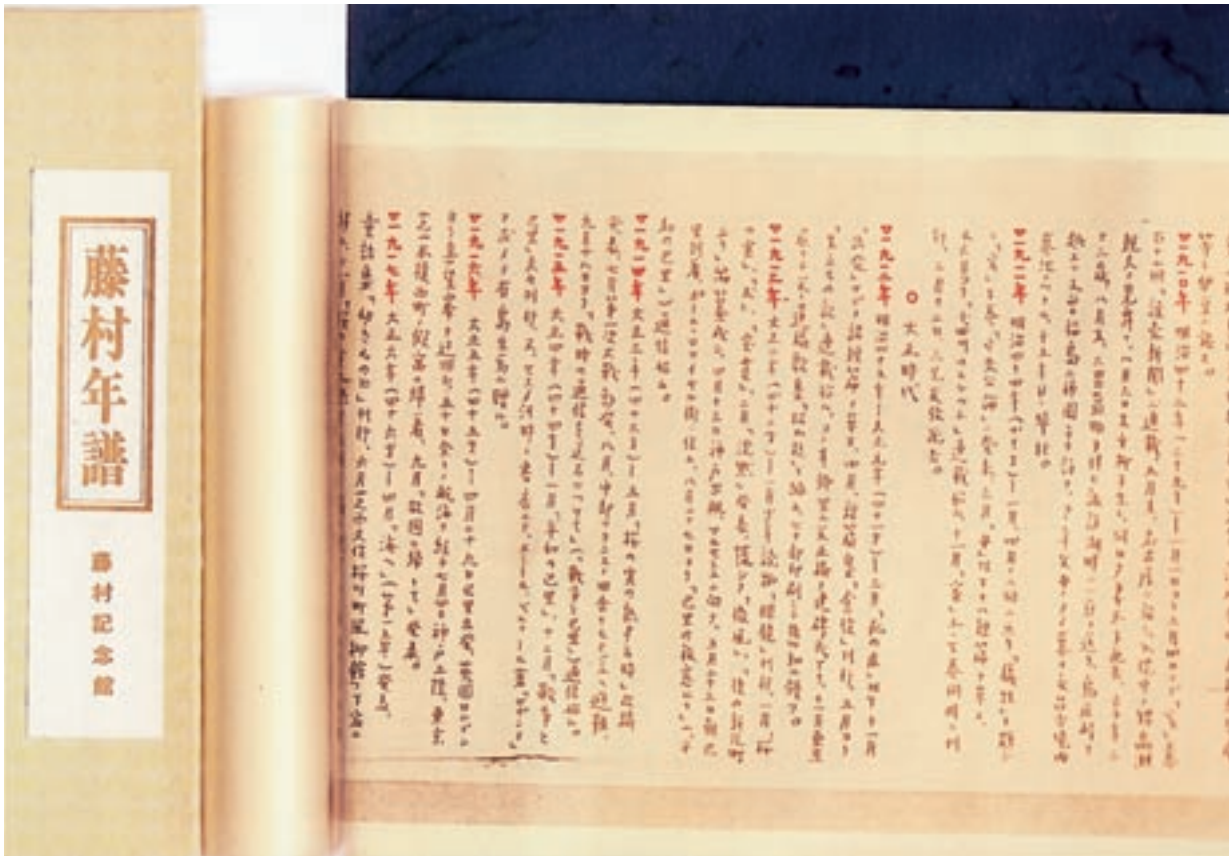

図35　藤村年譜

図36　『藤村詩集』

図37　同左（楠雄の署名と家訓）

図38　藤村家の家訓（『新潮日本文学アルバム　島崎藤村』より）

図39　朝日新聞（郡虎彦はどれ？）

【９月28日】アラビア海：新入の教師ニコラとヘミングウェイの話。変な夢。
六人部屋満室　①僕（辻邦生）、②五十歳前後で片腕のフルスチエおやじ、③苦りきった技師のアンドレ・ブーディエ、④押しつぶされたような顔の教師ニコラ、⑤半黒混血の鼻の悪い兵隊、⑥銀髪で落ち着いたモリー氏。
【９月29日】アラビア海：スタンダール・ヘミングウェイを読む。
【９月30日】アデン湾：日光強烈。
【10月１日】ジプチ：このところヘミングウェイを呼んでいる。Ｃ・Ｔの夢。
【10月２日】紅海：疲労・倦怠。あと六日。
【10月３日】紅海：パリ生活の思案。
【10月４日】（●記載せず）
【10月５日】地中海：下痢・薬。だるい。眠る。Ａの夢。昨夜もＡの夢。
フォーレのレクィエム。ギリシャに目覚める。
【10月６日】地中海： 体の調子が回復。
【10月７日】チレニア海：昨夜も変な夢。しばしばＡの夢。
【10月８日】（●記載せず）
【10月９日】パリ：リオン駅到着：Ｏが出迎え。Ｈさん宅で宿泊。

日本人留学生

カンボージュ号には、「日本人留学生」や「友人Ｔ」も乗船していた。いずれも二等船客だ。辻は、前者を「日本人留学生」と一括。氏名や人数を記さず、「否定的」な感情を示す。一方、「友人Ｔ」は、氏名は記さないものの、「好意的」な感情を示す。

【９月12日】：ツーリスト・クラスにいる日本人留学生（気が重い）。
【９月13日】：日本人留学生がギィに付きまとう（がっかり）。
【９月20日】：（シンガポール）植物園にゆくと、ばったり日本人に会った（困ったなと思った・まずかった）。
：ついさっきも、友人Ｔと一時間ほど話し込んだ（→仏語会話の達人）。

なだいなだ

「日本人留学生」の名前を知る手はないか。直ちに、出発時の写真に写っていた「なだいなだ」氏が思い浮かんだ。同氏はフランス政府給費留学生（1953年）の経験者で、作家かつ精神科医で、「老人党」提唱者である。

余談。ある時、「ステーキグルメ」の看板を見たフランス人のなだ夫人が、「“グルメ”って、なに語？」と聞いた。「おまえさんの国の言葉。フランス語だよ」と答えると、「えっ、フランス語？」と夫人は眼を丸くした（なだいなだ『どうでもいいようで、やっぱりどうでもいい話』111頁）。わが辞書に、「gourme(e)」は「堅苦しい、とりすました」とある。

メール

一面識もない私が、失礼ながら同氏にメールを送った。同氏はアルコール依存症専門医なので一句も書き添えた。思いがけず、親切な返事が返ってきた。御礼。

なだいなだ様。
メールにて失礼いたします。
昭和32年９月 辻邦生氏のパリ出発時に、若き時代のなだいなだ様のお写真があります。
当日、カンボージュ号に乗った日本人留学生は誰かをご教示いただければ幸いです。私は、
奈良大学文化財学科の考古学徒（団塊の世代1947年生まれ）で、川柳人の酒井龍一です。
なだいなだ様のご記憶があるうちに、是非ともご教示ください。
なだいなだ 嗚呼 酒飲みの守り神　龍一

酒井龍一様
なだ いなだです。
メール拝受。
そうですか。ぼくが見送りに行っておりましたか。記憶がうすれ、そういえば行ったような気がします。すでにスエズ運河の閉鎖のあったころだと思います。かれは最初は滞在費を稼ぐために、日産ディーゼルのために仕事するような話だったことを記憶しています。それもあてにならない。かれは友人の北杜夫の友人、つまり友人の友人で、そこに誰が見送りに行っていたかまでは思い出せません。お役に立てなくて残念です。

「なだいなだ⇔（友人）北杜夫（友人）⇔辻邦生」。辻邦生が「日産ディーゼル」に勤めていた情報は正確だが、日本人留学生の氏名・人数は不明のままだ。

なだ氏は江戸狂歌が好きで、著書『古典を読む 江戸狂歌』がある。「わが禁酒破れ衣となりにけり さしてもらおうついでもらおう」とか、「世の中は色と酒とが敵（かたき）なり どふぞ敵（かたき）にめぐりあいたい」とか歌いながら治療にあたられているようだ。酒飲みを理解されている名医。ここで一句。「*一回は落ちて見たいな酒の井戸 龍一*」。

H

「なだ・いなだ」というふざけたペンネームを有するHが現われ、いいかね、山みたいな大波がくるぞ。コップでも何でも忽ち木っ端ミジンだ。などと大仰なことを言うので、私はわざわざ金属製のコップ、灰皿などを買いこんだ。（北杜夫『どくとるマンボウ航海記』７頁）

「なだいなだ」はスペイン語Nada y Nada（ない また ない）に由来する。北杜夫はペンネーム。本名は斎藤宗吉（斎藤茂吉の次男）。両者は「医者」つながりの友達。北杜夫は辻邦生の友達で、「松高」つながり。辻邦生は本名。「なだいなだ」の本名は「堀内秀」。従って、頭文字は「H」。「秀」は「しげる」と発音。北杜夫『どくとるマンボウ航海記』に、辻邦生は「T」で登場する。

佐々木涇先生

同じころ、『辻邦生のパリ滞在』を書かれた佐々木涇先生（長野大学教授）の存在を知った。立教大学大学院時代に辻邦生に師事。パリのレストランで辻夫妻の出会いを尋ねて窘められた経験がある。先生にファクスで質問すると返事がきた。感謝。要点を記す。

1．９月16日の夢に出てくる「Ｔ・Ｍ」は三宅徳嘉であること。
2．「友人Ｔ」は不明。
3．10月１日の夢に出てくる「Ｃ」は山路、「Ｔ」は竹内であること。
4．辻先生の許可を得て、学習院大学資料館で元の大学ノートで確かめたこと。

日本人留学の実情は不明。「友人Ｔ」は誰か。辻周辺で「Ｔ」がつくのは、東大仏文同級生の「滝田文彦」と学習院仏文出身の「豊崎光一」。豊崎のパリ留学は1960年なので、候補を外れる。残るは滝田だが、手元に証拠がない。今後の課題となる。三宅徳嘉はフランス語発音研究で誉れ高く、辻の夢の中で、辻をフランス語の発音ができないと決めつけた人。「Ｃ」（山路）と「Ｔ」（竹内）も、辻の夢の中にでた人物。詳細不明。佐々木先生には、平岡篤頼（日本人留学生の一人）の著作も御教示いただいた。

日本人留学生４名？

辻邦生と平岡篤頼の対談で、４名「平岡篤頼・岩崎力・小木貞考（後の加賀乙彦）・小林路易」（平岡篤朝『パリふたたび』）が判明した。精神科医師の小木貞孝は、後日、小説家の「加賀乙彦」となる。小林路易の読み方は「小林るい」。次の記載から、「友人Ｔ」は「小木貞考」の可能性がある。だが「T」は付かない。

> 妻のおかげで、私はカンボージュ号の留学生のなかでは、小木貞考とだけ付き合った。
>
> （辻邦生「霧の中の肖像から」『永遠の書架にたちて』348頁）

不機嫌氏

> 夕食前、大きなトランク一つもった不機嫌そうなフランス人が、一人、アントル・ポン（四等）に乗りこんできた。乗客かというと、ただ、ウィと答えるだけだ。がっちりした体格で、ひどく、にがりきった顔をしている【９月16日】。

出発直後の９月６日、最初のフランス人「ギィ・シクレ」登場。一緒に朝食をとり、一緒に月夜の海を眺める。８日に、辻は「最初の友」と記し、以降、頻繁に登場する。

９月16日に別のフランス人（氏名の記載なし）が登場。友人シクレとは違い、彼を「不機嫌そうなフランス人」、「にがりきった顔」、「不敵な口と顎」、「好意を示さない」、「口をぜんぜんきかない」等と否定的に表現し、かつ氏名を記さない。『パリの手記Ⅰ』に記されない、除外された事件も多い。その一例を示す。

留学から帰国後の1971年、辻は「三人の芸術家の肖像」（『文学界』）で、「クロード・Ｒ＊＊」のエピソードを紹介。1999年、「船旅で結んだ友情」『のちの思いに』でも紹介した。2006年の「年譜」（『辻邦生全集20』には、「９月

４日、フランス郵船カンボージュ号の四等船客となって渡仏。甲板でギィ・シクレやクロード・ルージェスと懇意になった」ことが記されている。この人物は、「不機嫌そうなフランス人」とは別のフランス人だろう。

トリイコトリ

紅海を過ぎるころ、暑い太陽のもとで、私たちは甲板のテントに寝そべって雑談をしていた。
そのときクロードは、僕は日本語を知ってるんだといって、いきなり「トリイコトリ」と変な言葉を口にした。日本語に聞こえないことはないが、もちろん意味不明である。
（辻邦生「船旅で結んだ友情」『のちの思いに』）

「紅海を過ぎるころ」となると「10月２日」頃のことだ。このエピソードに該当する記載はない。「旅先で結んだ友情」を読んでわかること。

１．パリに到着後、クロード家を訪問した時、「トリイコトリ」とは、クロードの母（シモーヌ＝シモンヌ）に結婚を申し込んだ「郡虎彦」のことと知る。
２．シモーヌ（シモンヌ）は、当時、母方の祖父の経営するカフェ（サン・ミシェルに面した）で働いていた。
３．島崎藤村（小説家）・山本鼎（彫刻家）・郡虎彦（戯曲作家）のサイン入りの写真があった。
４．後日、杉山正樹氏が伝記を刊行した。

トライコ・コーリ

息子クロードは「トリイコトリ」と辻に言ったが、郡虎彦から直接に求婚された母は辻に「トライコ・コーリー」と言った。（辻邦生『時の中の肖像』73頁）

「郡虎彦（求婚）⇔シモンヌ（トライコ・コーリ）母⇔息子クロード（トリイコトリ）⇔辻邦生」。母の発音が息子より事実に近い。歴史情報は「電線ゲーム」の原理で伝わる。

郡虎彦

1913年．虎彦23歳。「大学を中退し、八月十六日、神戸より宮崎丸でヨーロッパに発つ。九月末，パリに着き、ひと月ほど滞在してミュンヘンへ移り住む」（杉山正樹『郡虎彦 その夢と生涯』）。

今

私が「郡虎彦」のことを書いている今は「2010年４月３日朝４時50分」。まだ暗い。コーヒー（ブルックス）を飲みつつ朝日新聞を開くと、24面文化欄に次の記事が眼についた。
「白樺100年」。・・・。武者小路実篤らを含む14人の群像中に「郡虎彦」の姿がある。ただし私はどれが虎彦かは不明。彼の身長は150㎝程度。小柄。白樺派は「一人称小説」が特徴。私は白樺派でないが「一人称考古学」が特徴だ。本日、「辻邦生⇔息子クロード⇔母シモンヌ⇔白樺派の郡虎彦⇔朝日新聞朝刊⇔私」のプロセスが発生した。

シモンヌの家

郡虎彦が求婚したクロードの母が働いていたカフェは「シモンヌの家」。サン・ミシェル大通りに面したポール・ロワイヤル。リュクサンブール公園プロムナード。噴水の南側にある。有名なカフェ「クロズリー・デ・リラ」や島崎藤村らの「シモーネの宿」の傍だが、原位置は未確認。今後の課題とする。藤村・山本・郡らは「シモンヌの家」の常連客だ（「エトランゼェ」（『藤村全集８』）。

【山本君が最初に藤村を誘う場面】「どうです。屋外へ出ませんか。桑重も今、シモンヌの家に来て居ます」。

【藤村がシモンヌを初めて見る場面】「娘は寒水石の卓を廻って私のところへも握手を求めに来た。この娘がシモンヌだ」。

【藤村が郡虎彦の身の想う場面】「郡君はまた郡君で旅の身に熱のあることを感ずると言って、そういう不安を強い酒に紛わらそうとしたことを私は覚えて居る」。

【藤村が山本君に話す場面】『シモンヌも今が可愛いさかりだね』。

【パリ滞在の感激を、漂白の一生を送った芭蕉に思いを託しつつ自己陶酔する場面】(長い思いを述べた後)、「これが長期の旅に揉まれた自分を例の『シモンヌの家』の前あたりに見つけた私だった」。

常連客は、満谷国四郎・小林万吾・安井會太郎・柚木及太・桑重儀右衛門・金山平三・小杉未醒・長谷川昇・藤田嗣治・島崎藤村・山本鼎・他。「例の奥まった部屋」が定位置。異質の郡虎彦は１ヶ月だけ。「健康をくれ、健康をくれ」の叫びを残して姿を消した（河盛好蔵『藤村のパリ』）。「シモンヌの家」の常連 金山平三は、アララギ派歌人で精神科医の「斎藤茂吉」と懇意。茂吉がキーパーソンとなり次のプロセスが生じた。

「金山は茂吉と懇意⇔金山が茂吉の分骨法要に参列⇔茂吉の次男は宗吉⇔宗吉は邦生の親友⇔邦生は船でパリ留学⇔同乗のクロードから母（シモンヌ）に虎彦の件を聞く⇔若き頃の母（シモンヌ）は「シモンヌの家」で働いている⇔虎彦は「シモンヌの家」の常連⇔常連の一人が金山⇔金山は茂吉と懇意⇔茂吉の息子は宗吉⇔宗吉は邦生と親友⇔辻邦生」。

シモーネの下宿

「シモンヌ（シモーヌ）の家」と「シモーネ（シモネエ）の下宿」とは違う。藤村と虎彦は「カフェ（十五六の可愛いさかりの娘）シモンヌの家（リュクサンブール公園の出入口）」の常連で、「（丈夫そうなマダム）シモネエの下宿」（ポール・ロワイヤル街６番地）に住んでいた。両者の名前が似ていても、女性の容貌が異なる。

「シモンヌの家」でも「シモーネの下宿」でも共存した藤村による虎彦の想い出は次のようなもの。「・・・旅の身に熱のあることを感ずると言って、そういう不安を強い酒に紛らわそうとしたことを私は覚えている」。「・・・ある薬を郡君に勧めた時に、そんなものまで用意して来たのか、年を取った人は違うと言って、郡君から笑われたことも有った」。

『藤村詩集』。

ここに『藤村詩集』（春陽堂版）がある。開くと、墨痕鮮やかに「簡素」と「楠雄」と記されている。「簡素」は藤村の生活信条。馬籠の藤村記念館に「簡素」の掛け軸がある（『新潮日本文学アルバム』）。「楠雄」は藤村の長男。父の刊行した詩集に長男が署名している。わが『藤村詩集』は「昭和二（1927）年二月十日改訂増補百八十五版」。

初版＝明治三十七（1904）年九月四日発行から23年後のもの。百八十五版発行時は藤村55歳。1905年生まれの楠雄22歳。わが『藤村詩集』は楠雄旧蔵書か。父の詩集に家訓「簡素」と自分の名前「楠雄」と記し、誰かに贈呈したのか。

裏表紙を開くと、「Sumiyoshi u.p. school Hisako Hujie」のペン書と「藤江文庫」の角印がある。「藤江ひさこ（名前の漢字は不明）」。私以前の蔵書者だ。

「藤村が『藤村詩集』を刊行⇔同改訂版の特製刊行⇔同書に長男楠雄が筆記（簡素・署名）・・・⇔藤江Hisako（署名・蔵書印）⇔・・・古本屋⇔酒井」。

特　　製

『藤村書誌』（国書刊行会）によると、『藤村詩集』は三種類ある。わが『藤村詩集』は「3．改訂増補185版」に近く、特異点がある。定価は「定價貳圓」。書誌記載の「一円五十銭」より高い。二序文でなく三序文。本の天が「金」。加えて、「簡素 楠雄」の墨書がある。必要あれば藤村記念館に寄贈しよう。

1．明治37年９月４日発行『藤村詩集』（春陽堂 定価八十銭 四六伴 五三四頁 袋付）～明治45年６月15日発行17版。
2．大正１年12月10日改訂版発行『藤村詩集 改訂版』（春陽堂 定価八十銭 函入 菊半裁版 五三三頁）～大正５年３月15日発行20版。
3．大正６年９月５日改正増補四十九版発行『藤村詩集 改刷版』（春陽堂 定価一円五十銭 菊半裁判 五百頁 合本詩集初版の序省略 合本第16版の序省略）～昭和２年２月10日発行改訂増補185版。

二本榎（高輪）

藤村がパリのカフェ「シモンヌの家」に出入りしていた頃、楠雄は「芝区二本榎西町三番地」に住んでいた。後年、辻邦生が居住する場所と重なる。楠雄と辻夫妻の証言。

【島崎楠雄】「私は九歳の春まで――あしかけ八年――新片町に住んで、父が外遊と同時に、高輪の伯父の家（芝二本榎西町三番地、広助伯父宅）へ弟鶏二と共に預けられた」（『父藤村の思い出と書簡』）。

【辻佐保子】「ここ高輪三丁目（辻夫妻の自宅）あたりは二本榎といい、・・・」（『辻邦生のために』）

【辻邦生】「震災にも戦災にも焼けなかったこの界隈は、藤村・透谷・小波たちの思い出に包まれ、・・・」（「高輪暮し」『海峡の霧』）。

藤村はパリへ出発するに際し、長男楠雄を二本榎へ預ける（1913年）→パリで「シモンヌの家」の常連となる→帰国した藤村は、1916年７月８日、二本榎の家に帰宅・・・時は流れ・・・辻邦生がパリへ渡航する（1957年）→同船したクロードから彼の母（シモンヌ）の話を聞く→辻邦生は高輪三丁目（二本榎）に転居してくる（1971年）。

時間の矢

【1957年10月１日 ジプチ】。このところ、キャビンにおらず甲板でヘミングウェイ（筆者註：『武器よさらば』35セントのペーパーバック）を読んでいるのだから、どうも書くことがたまってきて困る。

初留学の航海中、ヘミングウェイを読みふける辻邦生。時間の矢は「未来方向」(1957年→1980年)、パリ・デカルト街に向かって飛んでいた。この頃ヘンミングウェイは何をしていたか。遠くキューバで『回想のパリ－移動祝祭日』(*A Moveable Feast*)に着手。時間の矢は「過去方向」(1957→1922年)、同じく、パリ・デカルト街に向かって飛んでいた。

パリ到着

フランスに近づくと、辻の「手記」は急激にクールダウンする。パリでの生活設計に関し心は高揚するが、下痢・疲労・夢の記載が多くなる。マルセーユ港到着前後の記載はない。辻邦生が小説家になる夢と希望を抱いて「パリ・リヨン駅」に到着したのは1957年10月9日夜。「O」が出迎えた。　(続)

余　談

1921年12月2日：パリ・リヨン駅で妻リチャードスンがヘミングウェイの原稿入りスーツケースを盗まれる。　ヘミングウェイ「年譜」

1994年9月某日、私は、パリ・リヨン駅に大荷物と共に降り立った。わが発掘隊は、シリア・パルミラ遺跡の帰途、なぜか遠く、イタリア各所を見学。1週間だか10日だかの空白期間の後、イタリアから帰国する。最後のポンペイ見学を終え、土砂降りの雨の中、専用バスはローマ・テルミニ駅前に帰着した。「全員解散：後日集合！」の声。茫然自失。雨宿りすべく慌てて駅構内に入ると「パリ行き夜行列車」が存在した。熟考の余地なく、瞬時に大荷物と共に飛び乗った。国籍不明の同室者と共に、到着したのがパリ・リヨン駅だ。当然、「O」の出迎えもなかったし、原稿を必死に探す女性の姿も見なかった。駅前ホテルに荷を解き、早速、駅前で生牡蠣とワインで乾杯。旨くはあったが「孤独」でもあった。ルーブル美術館などパリ徘徊。セーヌ河岸の古本屋も経験した。

ここまで来たからはと、長距離夜行バス(＋フェリー)でロンドン・ヴィクトリア・コーチ・ステーションに到着。夜中であった。駅前に並ぶＢ＆Ｂのインターホン越しに宿泊を要請。O.K.の声で入ったら、何と日本婦人、何と「SAKAIさん」であった。有名らしく、帰国後に調べると『地球の歩き方 ロンドン』に名前があった。荷を解きパブへ直行。暗闇にひしめく常連を割り込み、「隣と同じ麦酒(びーる)をくれ！」と力んだら、隣人大男の眼が笑った。後年、同所に立ち寄ったら回転寿司に「変貌」していた。大英博物館等を徘徊。

ここまで来ればケンブリッジまで、と大型バスに乗り込み、なだらかな丘陵と羊の群れを眺めつつ到着。昼パブに入りかけると、「酒井さん、こんな所で何をしているんですか？」の声。旧知の千田嘉博(奈良大出身。当時、留学中。現奈良大教授)御一行様であった。

この後、不本意ながら、ケンブリッジ→ロンドン→パリ・リヨン駅→ローマに舞い戻って帰国したことは言うまでもない。各所で本を買い込む度にシリア土産と私物が廃棄され、遺物として様々なコインが手元に残った。かかる「経験」で私も少し「変貌」した。

【出典】図7・10は、『隊商都市パルミラの東南墓地の調査と研究』(シルクロード学研究センター 1998年)から複写・転載。